

# 差別意識と共感性

## Prejudicial Feeling and Emotional Empathy

麻 柄 啓 一

Keiichi MAGARA

### 問題と目的

「熱心に物事に取り組むことが必要だ」とか「真面目に物事に取り組む態度が必要だ」といった類の意見を日常生活で耳にすることがある。しかしすべての事柄に対して熱心に（あるいは真面目に）取り組むことは不可能であるから、人は現実には、意識的か無意識的かを問わず、内容を限定した上で選択的に熱心さや真面目さを発揮している。そうだとすれば「熱心さ」や「真面目さ」が望ましいものであるかどうかは、それが向けられた内容を吟味しないと判断できない。ところが日常生活では上の例のように内容を捨象してある態度や性向を要求したり目標としたり評価したりすることが多い。「協調性」「共感性」「やさしさ」などもそうである。人はすべての状況で協調したり、すべての人に対して共感したりすることはあり得ない。「どのような状況で」「誰に対して」発揮された協調性や共感性であるかを吟味しなくてはならない。本稿で扱うのは「共感性」が発揮される対象の限界についてである。

ある新聞の読書欄に次のような意見が掲載されたことがあるという。これはそれ以前に掲載されたAさんの投書に対して述べられた意見である（曹洞宗宗務庁編『差別語を考えるガイドブック』1994年76～77ページから引用）。

「先日の読書欄にのったAさんの投書について、私の意見を言いたいと思います。投書のなかでAさんは次のように述べられています。

『私は早く夫を病気で失いました。それからは、残された子どもを一生懸命に育ててきました。病院やビルの掃除婦までして頑張った甲斐があって、この春、末の子も高校を卒業して就職しましたので、ほっとしています』

Aさんの長年にわたるご苦労については、心から敬意を表したいと思います。しかし、『掃除婦までして』という表現についてはどうでしょうか。

Aさんは『掃除婦』という職業を賤しいものと考えておられるのではないのでしょうか。そういう仕事に従事することは、いわば身を落として働くことだ、と考えておられるように感じられます。もしそうだとすれば、残念ながらAさんの意識のなかには、明らかな職業差別意識があると言わざるを得ません。清掃業が賤しい職業だとすれば、同じ職業に携わっている多くの人たちの立場はどうなるのでしょうか。また、Aさんがご自分のお子さんにも同じような言い方をされたとしたら、お子さんにもやはり清掃業を賤しいものと考ええるような、差別意識が育ってしまうのではないのでしょうか。」

この投書の著者のように「掃除婦までして」という表現にはAさんの職業差別意識が現れているととらえるか、それともそれは考えすぎだととらえるかは読み手によって異なるものと思われる。本稿の論を進める前に筆者の立場をまず明らかにしたい。筆者は、表現者（発言者）が差別する意図を持っていたか否かではなくて、なされた表現が果たす機能に着目する必要があると考える。ここで「掃除婦をして」という表現と「掃除婦までして」という表現を比較してみよう。後者には「本来ならばしたくもない仕事に携わらざるを得なかった」というAさ

んの気持ちが現れていることは明らかである。そしてこの場合、Aさんがなぜ本来なら掃除婦という仕事をしたくないのかという個人的な理由（たとえば病弱で体力的に無理な仕事である等）が書かれていないので、読み手は書かれていなくても了解できる理由、つまりその仕事について一般に共有されがちなネガティブなイメージを喚起して「本来ならばしたくもない」という理由を納得することになる。ここで念のため「公務員までして」という表現と比較してみよう。この場合、なぜできることなら公務員という仕事をしたくないかという個人的な理由が書かれていないとしたら、自分の苦労の大変さを強調することはできなくなる。なぜならその仕事に携わることの大変さやつらさを、社会的に共有されたその仕事のイメージを通して訴えることができないからである。つまりAさんの文章は、①「掃除婦をして」という事実の叙述ではなくて「掃除婦までして」と書いたことによって本来ならばしたくもない仕事に携わらざるを得なかったことを表現していること、②掃除婦をしたくなかった理由について、その仕事について一般に共有されがちなネガティブなイメージを通して読者を納得させることになったという2点において、Aさんの表現は結果として職業差別の機能を果たしたことになる。意図的になされる差別発言は（差別と）わかりやすいが、世の中の差別問題は発言者がそれと意識していないところで維持されていることが多い。そしてそのような場合、発言者が気づいていない分だけ差別意識は変革されにくい。ここに差別問題のひとつの難しさがある。

ここで考えたいのは、Aさんの投書が普通どのように受け取られるかである。おそらくAさんの長年の苦労や、子どもが社会人になった喜びに対する共感を伴って受け取られるのではないだろうか。共感性の豊かな人ほどそのような受け取りをするのではないだろうか。しかしその場合、掃除婦をしている人たちへの潜在的な差別をAさんと共有したことになるだろうか。そもそも共感性というものが他人への暖かい態度を伴うものであるならば、潜在的に差別をされた人たちに対して共感性が向けられてもよいはずである。しかし、掃除婦をしている人とAさんの双方に同時に共感するというのは、論理的にも心理的にもあり得ないことのように思われる。

ここで冒頭の問題に戻る。われわれは内容を捨象して「共感性」を考えがちであるが、誰に対して発揮される共感性であるかを吟味しなくてはならない。Aさんの投書をめぐる状況の場合、「共感性」の高い人は誰に向かってそれを発揮するのであろうか。Aさんが潜在的に差別した掃除婦の人たちには共感性は向けられず、Aさんに対してのみ向けられるのではないかというのが本研究の基本的な仮説である。もしそうであるとすれば、内容を捨象して「共感性」を要求したり目標としたり評価することに対して問題提起をすることができる。さらに広くとらえれば、「熱心さ」「真面目さ」「協調性」などといった他の特性をとらえなおすきっかけとなるだろう。これが本研究の目的である。

本研究ではいわゆる「共感性」を取り上げるが、共感性は多くの研究者によってさまざまに定義されている。それらは認知的側面に焦点をあてたものと情動的側面に焦点をものに分けられる。本研究では情動的側面に焦点をあてる。Stotland (1969) は情動的共感性を「他人が情動状態を経験しているかまたは経験しようとしていると知覚したために、観察者にも生じた情動的な反応」と定義した。本研究で取り上げる例に即していえば、Aさんの現在の安堵と喜びを自分のことのように味わうことに対応するし、また、掃除婦をしている人たちが「掃除婦までして」と表現されたことによって被った無念さや差別の苦しみを自分のことのように感じることにとも対応する。

情動的共感性を測定するものとしては加藤・高木 (1980) が作成した尺度がある。これは Mehrabian & Epstein (1972) が作成した尺度項目の文章に手を加え、日本人の生活条件や生活感情によりふさわしい内容に修正したものである。中学生から大学生を対象にした調査の結果、ほぼ同一の因子構造が確認され、それらは「感情的暖かさ」「感情的冷淡さ」「感情的被影響性」と名づけられた。本研究では「感情的暖かさ」「感情的冷淡さ」の尺度項目を用いて情動的共感性を測定することにする。

本研究で確かめたいのは以下の予想である。「感情的暖かさ」の項目で測定された情動的共感性の高い人は、先のAさんに対しては共感性を発揮するだろうが、Aさんによって結果として差別された掃除婦の人たちに対しては共感性を発揮しないのではないか。なお「感情的冷淡さ」との関連については予め予想をたてることをしなかった。なぜなら加藤・高木 (1980) では「感情的冷淡さ」は「感情的暖かさ」とは異なる因子として抽出されているので、単純に逆方向の関連が見いだされるとは考えにくいからである。「感情的冷淡さ」がどのような関連を持つ

かについては、事後的に検討を行いたい。

## 方 法

調査対象は国立C大学教育学部の1年次学生84名（男子36名，女子48名）であり，調査は調査冊子を配布して集団で実施した。調査冊子は表紙を除き3ページからなっていた。調査冊子には2種類あり質問の順序が一部異なっていた（後述）。

表紙には「短時間で終わる調査です。ぜひご協力ください」と記されていた。その下に被験者の性別の記入を求めた。

- 
- a. 私は愛の歌や詩に深く感動しやすい。
  - b. 私は身よりのない老人を見ると、かわいそうになる。
  - c. 私は大勢の中でひとりぼっちでいる人を見ると、かわいそうになる。
  - d. 私は人が冷遇されているのを見ると、非常に腹が立つ。
  - e. 私は人がうれしくて泣くのをを見ると、しらけた気持ちになる。
  - f. 私は不幸な人が同情を求めるのを見ると、いやな気分になる。
  - g. 人前もはばからずに愛情が表現されるのを見ると、私は不愉快になる。
- 

Figure 1 情動的共感性を測定する質問項目

1ページ目には情動的共感性の質問項目が記されていた（Figure 1 参照）。これは加藤・高木（1980）が作成したのから項目を一部選択して用いた。項目 a から d までの4項目は「感情的暖かさ」と名づけられた因子から，項目 e から g の3項目は「感情的冷淡さ」と名づけられた因子からとったものである。加藤・高木と同様に，「全く違うと思う」「かなり違うと思う」「どちらかといえば違うと思う」「どちらともいえない」「どちらかといえばそうだと思う」「かなりそうだと思う」「全くそうだと思う」の7段階で回答を求めた。

2，3ページ目には，問題と目的の項で述べた新聞投書の内容に基づいて作成した「子どもの就職」というタイトルの投書（○山A子）と，それをめぐる二人（Bさん，Cさん）の感想が記されていた。Bさんの感想はAさんに対する共感を表した内容となっていた。その後で被験者に，Aさんに対してこのような（Bさんのような）気持ちをどれくらい持つかを質問した。これを[Aさんへの共感]と名づける。Cさんの感想は自分が掃除婦をしている立場から，Aさんの投書に職業差別意識を感じて釈然としないという主旨のものであった。その後で被験者に，Cさんと同じ気持ちをどれくらい持つかを質問した。これを[Cさんへの共感]と名づける。いずれも「0.全く持たない」から「5.大変強く持つ」まで6段階で回答を求めた。

2種類ある調査冊子のひとつでは，2ページ目に[A子さんの投書]と[Bさんの感想]が，3ページ目に[Cさんの感想]が記されていた。したがってこの場合被験者は[Aさんへの共感]→[Cさんへの共感]の順で自分の気持ちを評定することになる。これを冊子Iとする（Figure 2 参照）。冊子Iが配布された被験者をI群と名づける。I群の人数は41名（男子17名，女子24名）であった。別の冊子では，2ページ目に[Aさんの投書]と[Cさんの感想]が，3ページ目に[Bさんの感想]が記されていた。したがってこの場合被験者は[Cさんへの共感]→[Aさんへの共感]の順で自分の気持ちを評定することになる。これを冊子IIとする（Figure 2 の<注>を参照）。冊子IIが配布された被験者をII群と名づける。II群の人数は43名（男子19名，女子24名）であった。

[2 ページ目]

ある新聞の読書欄に次のような投書が掲載されたことがあります。

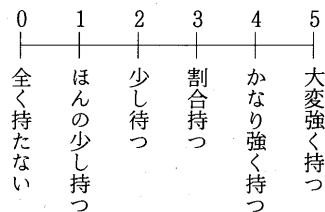
子どもの就職 ○山A子 (45歳)

私は夫を病気で早く失いました。3歳と6歳の子をかかえ私は途方にくれました。その時わたしはちょうど30歳。それからは女手一つで子どもを一生懸命育ててきました。病院やビルの掃除婦までして頑張りました。この春、下の子もようやく高校を卒業して就職しました。私は肩の荷を降ろしたような気がします。この15年間を振り返り感慨無量です。

Aさんの投書を読んでBさんは次のような感想を持ちました。

母一人で二人の子どもを育てていくには大変な苦労があったことだろう。15年間一人で頑張ったAさんは本当に偉いものだ。その甲斐あって子ども達はりっぱに成人した。この母親はどんなにかうれしいことだろう。

[質問] あなたはAさんに対して、このような気持ちをどれくらい持ちますか。ひとつ選んで○をつけてください。



[3 ページ目]

同じくAさんの投書を読んだのですが、Cさんは何か釈然としません。Cさんは掃除婦をしています。Cさんは次のように思ったのです。

Aさんの長年にわたる苦労については心から敬意を表したい。でも、「掃除婦までして」という表現はどうだろうか。Aさんは「掃除婦」という職業をいやしいものと考えているのではないだろうか。そういう仕事に従事することは、いわば身を落として働くことだと考えているように感じられる。もしそうだとすれば、残念ながらAさんの心の中には明らかな職業差別意識があるといわざるをえない。清掃業がいやしい職業だとすれば、同じ職業に携わっている多くの人たちの立場はどうなるのか。またAさんが自分の子どもに同じような言い方で自分の人生を語ったとしたら、子どももやはり清掃業をいやしいものとするような差別意識が育ってしまうのではないか。

[質問] あなたはCさんの気持ちを聞いてどう思いますか。あてはまる所に○をつけてください。

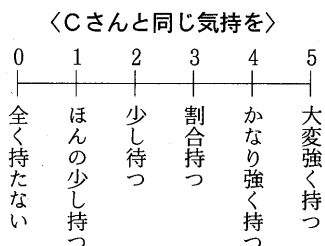


Figure 2 冊子1の内容

注. 冊子IIでは、2ページ後半にCさんの意見が、3ページにBさんの意見が載っている。すなわち、.....部分を除いて入れ替わることになる。

結果と考察

7段階で回答を求めた情動的共感性の質問は、それぞれに0から7の得点を与えて点数化して、項目aからdまでの4項目の合計得点と、項目eからgの合計得点を求めた。前者は加藤・高木(1980)によって「感情的暖かさ」と名づけられた項目である。以下ではこれを「共感性1」と名づける。後者は加藤・高木によって「感情的冷淡さ」と名づけられた項目である。以下ではこれを「共感性2」と名づける。いずれも得点が高いほど当該共感性が強いことを意味する。また0から5までの6段階で回答を求めた[Aさんへの共感][Cさんへの共感]をそのまま点数化した。いずれも得点が高いほど共感の程度が高いことを意味する。それぞれの得点の平均値と標準偏差をI・II群別にしてTable1に示す。I群とII群では共感性1, 2, Aさんへの共感, Cさんへの共感のいずれの平均値の間にも有意な差は認められない。

Table 1 I群・II群の各測度での平均得点(カッコ内はSD)

	共感性1	共感性2	Aさんへの共感	Cさんへの共感
I 群	15.9 (4.3)	7.0 (3.1)	3.1 (1.0)	2.5 (1.4)
II 群	16.7 (3.1)	7.0 (2.9)	2.9 (1.1)	2.8 (1.1)

[Aさん→Cさん]の順で評定を求めたI群の結果から検討する(Table2参照)。「共感性1」と[Aさんへの共感]の間には有意な正の相関( $r=0.42$ )が認められた( $t=2.91, df=39, p<.01$ )。「感情的暖かさ」が強い人ほどAさんに共感するといえる。「共感性1」と[Cさんへの共感]の間の相関係数は0.09とゼロに近い値であった。「感情的暖かさ」とCさんへ共感は無関係といえる。以上の2点から本研究の予想はI群において確かめられた。また[Aさんへの共感]と[Cさんへの共感]の間には有意な傾向の負の相関( $r=-0.28$ )が認められた( $t=1.79, df=39, p<.10$ )。AさんとCさんへの共感は背反的である可能性が示されている。

Table 2 I群における各測度間の相関係数

	Aさんへの共感	Cさんへの共感	共感性2
共感性1	0.42**	0.09	-0.28°
共感性2	-0.04	-0.05	
Cさんへの共感	-0.28°		

\*\* $p<.01$ , ° $p<.10$

次に[Cさん→Aさん]の順で評定を求めたII群の結果を検討する(Table3参照)。「共感性1」と[Aさんへの共感]の間には有意な正の相関( $r=0.46$ )が認められた( $t=3.31, df=41, p<.01$ )。「感情的暖かさ」が強い人ほどAさんに共感するといえる。「共感性1」と[Cさんへの共感]の間の相関係数は0.05とゼロに近い値であった。「感情的暖かさ」とCさんへ共感は無関係といえる。以上2点はI群と同じ傾向であった。本研究の予想はII群においても確かめられた。[Aさんへの共感]と[Cさんへの共感]の間の相関係数は-0.25であり、有意ではないがやはり弱い負の相関があった。

Table 3 II群における各測度間の相関係数

	Aさんへの共感	Cさんへの共感	共感性2
共感性1	0.46**	0.05	-0.18
共感性2	-0.11	0.37**	
Cさんへの共感	-0.25		

\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

以上はI群と同様の結果であるが、次にI群とは異なる点をまとめる。II群では「共感性2」と「Cさんへの共感」の間に有意な正の相関 ( $r=0.37$ ) が認められた ( $t=2.55, df=41, p<.05$ )。II群では「感情的冷淡さ」が強い人ほどCさんに共感することになる。この点において評定の順序効果が生じた。この場合、加藤・高木 (1980) の「感情的冷淡さ」の因子は、感情に溺れずに冷徹に事態を把握しようとする構えに結びつきやすいと考えられる。そのような構えによって、ある人が潜在的に差別を受けていることを把握しやすくなり、その人に対して共感性が向けられたと考えられる。これに対してI群ではまずAさんに対する評定が求められたことによって、そのような構えが発揮されにくくなり、「共感性2」と「Cさんに対する共感」の間にこのような関連が認められなかったと考えられる。

次に以上の結果を男女別にして見てみる。I群の結果を男女別にしてTable 4, Table 5に示す。I群の男子では有意な相関は一個も認められなかった。ただし「共感性1」と「Aさんへの共感」の相関係数は0.39であり、有意でなかったのは人数が少ないためと考えられる。「共感性1」と「Cさんへの共感」の相関係数は0.02とゼロに近かった。以上2点はI群全体で見られた傾向と一致する。

Table 4 I群男子における各測度間の相関係数

	Aさんへの共感	Cさんへの共感	共感性2
共感性1	0.39	0.02	0.22
共感性2	0.30	0.01	
Cさんへの共感	-0.22		

Table 5 I群女子における各測度間の相関係数

	Aさんへの共感	Cさんへの共感	共感性2
共感性1	0.47*	-0.05	-0.72**
共感性2	-0.38°	0.03	
Cさんへの共感	-0.46*		

\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$ , ° $p<.10$

I群の女子でも「共感性1」と「Aさんへの共感」の間には有意な正の相関 ( $r=0.47$ ) が認められた ( $t=2.47, df=22, p<.05$ )。また「共感性1」と「Cさんへの共感」の間の相関係数は-0.05とゼロに近かった。以上2点はI群全体でも男子のみにも共通して見られた傾向である。「Aさんへの共感」と「Cさんへの共感」の間に有意な負の相関 ( $r=-0.46$ ) が認められた ( $t=2.24, df=22, p<.05$ )。この傾向は、有意差はないもののI群全体でも男子のみにも共通して見られる。女子のみに見られる傾向としては、「共感性2」と「Aさんへの共感」の間に-0.38という弱い負の相関が認められた ( $t=1.94, df=22, p<.10$ )。「感情的冷淡さ」が強いほどAさんへ共感しないことになる。また「共感性1」と「共感性2」の間の相関係数が-0.72と高い ( $t=4.85, df=22, p<.01$ ) ことから、I群の女子にとっては「共感性1」と「共感性2」は方向が逆なだけでほぼ同一の因子として働いている可能性が考えられる。

Table 6 II群男子における各測度間の相関係数

	Aさんへの共感	Cさんへの共感	共感性2
共感性1	0.42°	0.04	-0.09
共感性2	0.31	0.01	
Cさんへの共感	-0.30		

° $p<.10$

Table 7 II群女子における各測度間の相関係数

	Aさんへの共感	Cさんへの共感	共感性 2
共感性 1	0.62**	0.11	-0.39°
共感性 2	-0.41*	0.69**	
Cさんへの共感	-0.24		

\*\*p<.01, \*p<.05, °p<.10

II群の結果を男女別にしてTable 6, Table 7に示す。男子では「共感性1」と「Aさんへの共感」の間には有意な傾向の正の相関 ( $r=0.42$ ) が認められた ( $t=1.89, df=17, p<.10$ )。また「共感性1」と「Cさんへの共感」の相関係数は0.04でありゼロに近かった。以上2点はII群全体で見られた傾向と一致する。

II群の女子では「共感性1」と「Aさんへの共感」の間には有意な正の相関 ( $r=0.62$ ) が認められた ( $t=3.73, df=22, p<.01$ )。また「共感性1」と「Cさんへの共感」の間の相関係数は0.11と低かった。以上2点はII群全体でも男子のみにも共通して見られた傾向である。女子のみに見られる傾向として、「共感性2」と「Aさんへの共感」の間に有意な負の相関 ( $r=-0.41$ ) が認められた ( $t=2.10, df=22, p<.05$ )。また「共感性2」と「Cさんへの共感」の間には強い正の相関 ( $r=0.69$ ) が認められた ( $t=4.41, df=22, p<.01$ )。これらをまとめるとII群女子で「感情的冷淡さ」が強い人はCさんに共感しAさんには共感しないことになる。

### 総括的討論

本研究で得られた結果をまずまとめる。主たる結果は次の①である。

①情動的共感性の中の「感情的暖かさ」は、「Aさんに対する共感」とは正の相関を示したが、「Cさんへの共感」とは無相関であった。これは評定の順序や被験者の性別にかかわらなかった。

さらに以下の②～⑤の諸点が明らかになった。

②「感情的冷淡さ」は、女子では「Aさんに対する共感」と負の相関を示した。これに対して男子では有意差はないものの両者は正の相関を示した。これは評定の順序に関わらなかった。

③「感情的冷淡さ」は、Cさんの評定を先に行ったII群女子では「Cさんへの共感」と正の相関を示した。他の者 (II群男子, I群男女) においては無相関であった。

④「感情的暖かさ」と「感情的冷淡さ」は女子においては負の相関を示した。男子ではこのような関係は認められなかった。

⑤「Aさんへの共感」と「Cさんへの共感」はI群女子で負の相関があった。他の者 (I群女子, II群男女) でも有意差はないものの同様の傾向であった。

以上の結果を踏まえて全体の考察を行う。

①の結果から本研究の予想は確かめられた。すなわち「感情的暖かさ」の項目で測定された情動的共感性の高い人は、Aさんの長年の苦勞や、子どもが社会人になった喜びに対しては共感性を発揮するが、Aさんによって結果として差別された掃除婦の人たちに対しては共感性を発揮しなかったのである。この結果は、「誰に対して」あるいは「どのような状況で」発揮される共感性であるか具体的に吟味する必要性を示している。したがってそのような具体的な内容を捨象して共感性を要求したり目標とすることは誤りとなる。本研究の結果から考えると、「熱心さ」「真面目さ」「協調性」などに関しても事情は同じである可能性が高い。日常生活ではともすると内容を捨象してある態度や性向を要求したり目標としたり評価したりすることが多い。本研究の結果はこのような風潮に対する批判となる。

「問題と目的」の項では「感情的冷淡さ」との関連については予想を立てることをしなかった。結果から考えると、「感情的冷淡さ」は女子と男子では異なる機能を果たしているようだ。まず女子では、結果④②から「感情的冷淡さ」は「感情的暖かさ」と方向が逆だけで同じ因子として働いている可能性が高い。ただし③の結果か

ら考えると、差別されたCさんの気持ちを先に知った場合には、「感情的冷淡さ」は感情に溺れずに冷徹に事態を把握しようとする構えとして働くことによって、Cさんへの共感を生み出す。つまりこの場合は「感情的暖かさ」とは異なる因子として機能する。

男子では、結果④から「感情的冷淡さ」は「感情的暖かさ」とは異なる因子である可能性が示唆される。ところが②に示されるように、男子では「感情的冷淡さ」は「感情的暖かさ」と同様にAさんへの共感を生み出す傾向が見られる。つまり「感情的冷淡さ」は「感情的暖かさ」と同じ機能を果たしている。この点については現在のところ整合的な解釈が困難であり問題として残る。

最後に、今回の実験材料で取り上げたCさんのように、表面的には差別であることが見えにくい結果として差別を受けている人に対する共感をどのように生み出すことができるかという問題を考えたい。女子については先の考察から、感情に溺れずに冷徹に事態を把握しようとする構えを持つことが一定の効果を持つことが期待できる。ところが男子では、Cさんへの共感は「感情的暖かさ」「感情的冷淡さ」のいずれとも関連を持たなかった。差別を受けている人に対する共感は、おそらく「共感性」だけからは生じにくく、その差別をめぐる社会的な事情に気づく結果としてもたらされるものように思われる。感情に溺れず冷徹に事態を把握しようとする構えも、そのような気づきへの入り口となっていると考えられる。

#### 引用文献

- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における情動的共感性の特質 筑波大学心理学研究 2, 33-42.  
Mehrabian, A., & Epstein, N. 1972 A measure of emotional empathy. *Journal of Personality*, 40, 525-543.  
曹洞宗宗務庁(編) 1994 差別語を考えるガイドブック 解放出版社  
Stotland, E. 1969 Exploratory investigations of empathy. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. 4, New York : Academic Press, 271-314.